

【論文】

高齢者へのアウトリーチにおける同居する ひきこもり成人の子への関係構築

—地域包括支援センターの社会福祉士に対する調査より—

淡路和孝

和文抄録

本研究は、地域包括支援センターの社会福祉士（以下、社会福祉士）に対する調査を通じて、高齢者へのアウトリーチが同居するひきこもり成人の子（以下、成人の子）に肯定的な変化をもたらすために、社会福祉士が成人の子とどのような関係を構築しているのかについて明らかにすることを目的とする。社会福祉士を対象に半構造化面接を実施した結果、社会福祉士が高齢の親に関する状況について成人の子と話し合うなかで、成人の子が自らの意志で社会福祉士に相談できるようになり、さらに高齢の親に関する思いも話せるようになった。地域包括支援センターのアウトリーチは成人の子のひきこもり解消を目的としていない。むしろ、このことが成人の子との対等な関係を構築し、成人の子に肯定的な変化をもたらしたと考えられる。これらは先行研究にない独自の視点である。

キーワード：ひきこもりの成人の子、高齢者世帯、地域包括支援センター、社会福祉士、アウトリーチ

I. 背景

日本では40歳から64歳までのひきこもり者が約61.3万人存在し、その51.0%が5年以上の期間ひきこもりの状態にあると推定されている。また、ひきこもり者の53.2%が関係機関に相談したくないと回答し、55.6%がこれまでのひきこもりの状態について関係機関に相談したことがないと回答した（内閣府 2019: 11, 58,

64）。これらの調査結果から、中年期のひきこもり者が関係機関に支援を求めずに生活している可能性が示唆される。

ひきこもり者が中年期に達すると、その親は高齢者（以下、高齢の親）となり、高齢の親に生活支援が必要になる可能性が高まる。高齢の親と同居するひきこもり成人の子（以下、成人の子）は、高齢の親の経済力に依存し続けるため、世帯全体が生活困窮に陥るリスクがある。このような家庭では、高齢の親の介護や生活支援、成人の子のひきこもり状態、世帯全体の生活困窮など複合化・複雑化した生活課題に対応する必要がある。これらは「8050問題」とも呼ばれ、社会的な課題となっている（勝部 2019; Yoshioka-Maeda 2020）。

2024年6月30日受付／2024年10月25日受理

AWAJI Kazutaka

堺第3地域包括支援センター／龍谷大学大学院社会学
研究科

E-mail: kaza0915@gmail.com

他方、複合的かつ複雑な課題に対応するために、多機関協働による包括的な相談支援体制の構築が提言されている。具体的には、社会福祉士がアウトリーチなどを通じて個人やその世帯全体の生活課題を把握することが求められている（厚生労働省 2018: 4-5）。アウトリーチとは、支援が必要な者に対して積極的に自宅などへ出向く支援の方法である（Barker, R. L. 2013: 309; Harris et al. 2018: 348-349; 小室 2007: 4; 日本社会福祉士養成校協会 2005: 8）。

成人の子にとって、アウトリーチは肯定的な変化をもたらすことが明らかになっている。例えば、東出ら（2020）は東京都アウトリーチ支援事業における「8050」事例の特徴、および支援内容について明らかにした。対象となった事例は、地域の保健所等より要請を受けて東京都アウトリーチ支援事業の介入をおこなった成人の子である。分析の結果、成人の子のひきこもり状態、支援の受け入れ、医療状況、問題行動、地域ネットワークづくりに関して有意な変化が見られた（東出・新村・西ほか 2020）。

高齢の親に関しては、主に介護保険法第115条の46に基づき設置されている地域包括支援センターがアウトリーチを担う。特定非営利活動法人KHJ全国ひきこもり家族会連合会（2019）が全国の地域包括支援センターに対して実施した調査によれば、回答した地域包括支援センターのうち約8割以上（220か所）が成人の子と同居する高齢者世帯に対応した経験があることが判明した。さらに、これらの世帯では経済的困窮、住環境の問題、孤立など多層な生活課題が潜在していることも明らかとなった。地域包括支援センターが実施した支援では、多くの事例で高齢の親への支援を目的とした自宅訪問を実施しており、成人の子との面談も約半数のセンターでおこなわれていた。しかし、成人の子に対する面談に困難さがあり、さらに社会参加の拒否感もある。そのため、成人の子と同居する高齢者世帯が抱える課題を解決することは簡単ではないとされている（特定非営利活動法人KHJ全国ひきこもり家族会連合会 2019: 16）。

原田ら（2019）の調査によると、鳥取県内地域包括支援センター全33か所のうち15か所のセンターで成人の子がいる事例の支援を経験していた。成人の子の多くは40歳代、50歳代であり、回答したセンターのうち約4分の3を占めていた。しかし、相談や支援を受けている成人の子は約3分の1に過ぎないことが明らかとなった。さらに、高齢の親に対する介護サービス利用の拒否や成人の子の支援拒否もみられた。この結果から、高齢の親の介護支援と並行して、成人の子の生活支援と経済支援が早急の課題であると指摘している（原田・馬淵・浜田ほか 2019）。このように、地域包括支援センターが成人の子と同居する高齢者を支援する事例では、高齢の親の生活支援、成人の子の社会的孤立、世帯全体の生活困窮など複合的な課題が存在する。それにも関わらず、高齢の親、成人の子共に支援を求めないことが多い。そのため、地域包括支援センターにとって困難事例のひとつとして捉えられている（加川 2010; 吉岡 2019）。

先行研究では、成人の子に対するアウトリーチが肯定的な変化をもたらすことが明らかになっている。しかし、高齢の親をアウトリーチする過程で成人の子を発見し、支援を通じて成人の子とどのような関係を構築しているのかは十分に解明されていない。

II. 目的

本研究は、地域包括支援センターの社会福祉士に対する調査を通じて、高齢者へのアウトリーチが同居するひきこもりの成人の子に肯定的な変化をもたらすために、社会福祉士が成人の子とどのような関係を構築しているのかについて明らかにすることを目的とする。

本研究の意義は、多機関協働による包括的な相談支援体制の構築と成人の子に対する新たなアウトリーチの方法論の確立に貢献できることにある。さらに、地域包括支援センターの社会福祉士の実践力向上に寄与できる。

Ⅲ. 調査方法

1. インタビューの実施

a) 研究参加者の選定方法

成人の子と同居する高齢者の事例を経験している地域包括支援センターの社会福祉士を対象にインタビュー調査を実施した。選定は機縁法に基づき、資格取得後3年以上かつ現在の職場に1年以上の社会福祉士を対象にした。資格取得後3年以上とした根拠は、日本社会福祉士会において実施する生涯研修制度の基礎課程が3年であるからである（日本社会福祉士会 生涯研修センター 2015: 14）。また、現在の職場での経験年数が1年以上である理由は、異動などにより資格取得後の経験年数と現在の職場での経験年数が必ずしも一致しないことを考慮したためである。

選定方法の詳細であるが、調査者が直接研究参加者に依頼する方法、または研究参加者からの紹介を受ける方法を採用した。

b) インタビューの構成

事前にインタビューガイドを研究参加者に送付し、半構造化形式でインタビューを実施し、事例を含めたエピソードを自由に語ってもらう形で進めた。インタビューの内容は以下の3つの部分で構成された。1つ目に、基本属性として、法人種別、現職場の就労年数、社会福祉士としての経験年数について質問した。2つ目に、成人の子と同居する高齢者世帯の事例を支援する際の現状と課題について質問した。具体的には、世帯が抱える具体的な生活課題、社会的孤立を招く要因、支援開始時の工夫、信頼関係構築のための工夫、アウトリーチによる肯定的な変化、支援のゴールについて質問した。3つ目に、アウトリーチにおける相談機関および社会福祉士の役割について尋ねた。具体的には、所属している相談機関が果たすべき役割、および社会福祉士としての役割について質問した。

2. コーディングの方法

佐藤（2008）の方法を参考にコーディングを

おこなった。この方法は、元の資料の文脈から脱文脈化（セグメント化）、再文脈化（ストーリー化）をおこない定性的コーディングをおこなう。さらに、事例ーコード・マトリクスを作成し、複数のコード間および事例間の比較をおこない、概念モデルを構築する。

手順として、単語や文節ではなく、ある程度文脈や意味が理解できる「文書セグメント」（以下、セグメント）ごとに切片化をおこなう。要約したセグメントからオープン・コーディングをおこなう。オープン・コーディングから焦点的コーディングをおこない、さらに抽象的・概念的カテゴリーに対応するコードを作成する。複数のコード間ならびに「文書セグメント」の関連性を明らかにするために、コード・マトリクス表を作成するとともに、必要に応じてコードの修正をおこなう方法である（佐藤 2008: 17-143）。

具体的には、録音したインタビューデータを文字化した。文書を切片化したうえでおおむね1文から2文程度のセグメントを作成し、それらを踏まえコーディングを実施した。さらに、コードを表側、研究参加者を表頭とするセグメント数およびセグメント例を記載したマトリクス表（以下、セグメント表）を作成した。

3. 分析の対象およびセグメントの選定基準

a) 分析の対象

インタビューではインタビューガイドに基づき質問をおこなったが、そのうちの一部を対象とした¹⁾。具体的には、インタビューガイドの「成人の子と同居する高齢者世帯の事例を支援する際の現状と課題」で語られた内容を中心に、高齢の親の生活困窮に介入した箇所、成人の子へ介入した箇所、成人の子が肯定的に変化した箇所を分析対象とした。

b) セグメントの選定基準

セグメントについては、研究の目的に直接関係しない内容を除外した。さらに、研究参加者全員からセグメントが得られなかった内容も除外した。

4. 倫理的配慮

調査への参加は自由意志であり、辞退に対して不利益を被ることは一切ないこと、調査対象者の承諾を得てICレコーダーに録音すること、個人やその関係者が特定される情報は一切収集しないこと、インタビューの回答は拒否できること、調査結果について学会発表を含む公表をおこなうこと、以上について書面にて説明のうえ、所属長および研究参加者の署名により調査の同意を得た。なお、龍谷大学「人を対象とする研究に関する倫理委員会」(申請番号 2018-21)の承認を得て実施した。

5. 分析結果の妥当性の確認

ソーシャルワーク領域の研究に知見を有する者より、セグメントとコードの妥当性を確認した。

IV. 結果

1. 研究参加者の概要

本研究に参加した5名の社会福祉士であるが、調査者による直接依頼が2名、調査対象者からの紹介によるものが3名であった。インタビューは2019(平成31)年1月から2月にかけて実施した。運営主体・所属する自治体²(アル

ファベット表記)・社会福祉士としての経験年数(年目)・現職場の経験年数(年目)・インタビュー時間・セグメント数を表にまとめた(表1)。

2. 高齢の親に対するアウトリーチと成人の子へのアプローチに関するセグメント表の作成

インタビュー調査においては、合計1,006セグメントが生成された。そのうち、130セグメントを選定し分析の対象とした。インタビューの分析から6つのコードが生成された。コードは「高齢の親に対するアウトリーチ」、「成人の子に対するアプローチ」、「成人の子の肯定的な変化」に大別された。

以下に各コードを〈 〉で記す。各コードと対応するセグメント数、セグメントの例をセグメント表に示した。[]はインタビューアが発した言葉、およびセグメントの内容を明確にするために筆者が追記したものである。なお、表ではコーディングされたセグメントのみ記載しているが、セグメントの意味や背景を正確に伝えるために、本文中では前後の文脈を含めて説明する(表2)。

表1 研究参加者の属性

氏名	自治体	運営主体	社会福祉士としての経験年数(年目)	現職場の経験年数(年目)	インタビュー時間	セグメント数
A	a	委託型(社協以外)	5	5	58分54秒	201
B	b	委託型(社協以外)	12	3	63分03秒	241
C	b	行政	10	4	52分42秒	174
D	b	行政*	4	4	58分51秒	203
E	a	委託型(社協以外)*	7	5	56分25秒	187

注：*は基幹型・機能強化型、自治体aとbは日常生活圏域がそれぞれ異なる。

高齢者へのアウトリーチにおける同居するひきこもり成人の子への関係構築

表2 高齢の親に対するアウトリーチと成人の子へのアプローチに関するセグメント表

コード	A	B	C	D	E	
高齢の親に対するアウトリーチ	1. 高齢の親を支援するために継続的に訪問する(計25セグメント)	4セグメント 例:我々の場合って、短いスパンで濃く関わるといふ風な。むしろ、まあ、もう、1週間毎日通うことだって実際にありますし	8セグメント 例:まあ、いつも使うですわね。高齢者訪問ですわって。で、もうここで、玄関で、足を挟む。閉められへんように。	3セグメント 例:結構、足しげく通ったりとかですね。	5セグメント 例:ひたすら私たちのメモを置いて行ったり、訪問したら、必ず何かを、電話の着信履歴は残したりね。	5セグメント 例:1週間後に。2週間後に。行きますね。って言うて、「いいです。」って言うて頂けるんであれば、また、来ますね。ということで、
	2. 高齢の親の生活を改善するために経済的問題にアプローチする(計31セグメント)	8セグメント 例:生活保護の手続きであったりとかというところの助言をしたりとか、橋渡しをしたりとか	2セグメント 例:そうですね。低所得もあるし、場合によっては、生保[生活保護]につないだケースもあるし、とにかく親が抱え込んでいるんだけど、	4セグメント 例:[例えば、生活保護とか?]はい。配食サービスであったりとか。行ったから進めるって感じですね。	11セグメント 例:お母さんの年金をもう娘さんが使ってはって、お母さんも管理できなかったみたいで。ほんでも、払っている。いうたら終わりが見える感じではなかったんで、もうこのままいくと、本人さんたちに不利益しかないんで、まあ、ご意見もわかるけども、でも専門的な方に入ってもらって、	6セグメント 例:債務がどんだんどんどん増えてきている状況だったので、どう考えても、今の収入差し引いても、払っている。いうたら終わりが見える感じではなかったんで、もうこのままいくと、本人さんたちに不利益しかないんで、まあ、ご意見もわかるけども、でも専門的な方に入ってもらって、
成人の子に対するアプローチ	3. 高齢の親についてとまを考へる姿勢で成人の子に接する(計28セグメント)	6セグメント 例:息子さんとお話ししていく時には、「まあ、こういうことが大変ですよね。」というようなところを共感して、息子さんにも心を開いてもらうとか。	1セグメント 例:[私は親とうまいことやっていきたい、こんなことになりたくなかった。]じゃあ、作戦立てようっていうたんです。	2セグメント 例:とりあえず、顔と名前を覚えてもらって、なんかあったら、一緒に考えてくれる人っていう認識を持ってもらうことから	12セグメント 例:あなたも心配・おとうさんおかあさんも心配、だから私たちは何か力になることはないですか。っていうスタンスで行かないと、やっぱり介護者への信頼関係が築けない。	7セグメント 例:まずは「お母さんのことで来ているんです。」っていうことで、「何か困っていることがあったらご協力しますよ」というところからは、入りますかね。
	4. 成人の子から高齢の親に対する意見を聞く(計19セグメント)	4セグメント 例:息子さんがどこまでしないといけないのかというところを、別にしなくても、いいわけですしというところをお示しして	6セグメント 例:[成人の子は]親を思いやっている。それが、ちよつとずれてきているだけやのっていう形で、どうしたらいいの?って、実際、その子に聞いかけましたね。	1セグメント 例:親が認知症になってくると、失禁とか食べこぼしとか生活のなかでほころびが出てくるに伴って、こゝ苛立ち、「前はそんなんちゃうかったやん」とか、何でこんなことになるの?という子ども自身が親を受け入れられなくなって、苛立つというようなことに。	6セグメント 例:娘さんととにかくしてコンタクトを取りたい。介護者のね意向を確認したい。と言うことで	2セグメント 例:あの、息子さんが出てこられて、まあお母さんどうですか?だんだんこゝろ、どうですか?って言ったら、「いや、やっぱり大丈夫です。」って言いはるんですけど。
成人の子の肯定的な変化	5. 成人の子が自らの意志で社会福祉士に相談できる(計15セグメント)	2セグメント 例:息子さん自体は、まあ、相談の数が多くなってきたりとか。	2セグメント 例:警察からの通報で動いたケースは、親が信頼してくれたから、なかなかねひきこもりの方って、ここまで歩いてくるのって大変なんです。でも来てくれたんです。	1セグメント 例:まあ、感謝はしてもらえようになりましたね。最初娘さんもNOでしたが、ここが助けてくれる機関や、というのがきっかけでもらえた。	6セグメント 例:私と実際会った上で、この人なら、ちよつと1回くらいは話でも良いのかな。と思ってくださったのかもかもしれませんね。	4セグメント 例:私たちに対するご理解は少しずつかもしれませんが、増えてくるのかなというのを感じているんですけど。
	6. 成人の子が高齢の親に対する思いを社会福祉士に話ができる(計12セグメント)	2セグメント 例:入院した時も、「[親の]顔見に行こか。」とか、入院しても「帰ってこらんでもええねん。」感じだったのがお金のことばっかりで、入院費が嵩むとかになってることが、まあ、「元気ですわ。」というようなことであったりとか。	4セグメント 例:親と仲いいから、親が、「Bさんところに行ったら、なんでも話聞いてくれるから」って行ったら、2時間くらいずっと今の思いのたけを話してくれて	1セグメント 例:親が自分を見るもんや。って思っていたり、そうで開き直っていたり。そうですわね。こんなになったのは親のせいや。	4セグメント 例:母親・・・父親とはツリが合わないんで、話したくないんです。それは、理解してもらいたいって言うても無理やと思うんで、理解してもらわなくても良いんですけども	1セグメント 例:日常生活を見ると、割とちよこちよこと、自分の好きなように使ってはったりいうか、現実味がどこまであるんかなって、そのお母さんの動きに、息子さんも困ってはるところもあって、息子さん割とそこはまずいって言うのは、

注:[] はインタビューアーが発した言葉、およびセグメントの内容を明確にするために筆者が追記。

a) 高齢の親に対するアウトリーチ

1) <高齢の親を支援するために継続的に訪問する>

(A) は4セグメント, (B) は8セグメント, (C) は3セグメント, (D) は5セグメント, (E) は5セグメント, 計25セグメントがコーディングされた。

例として, 高齢の親と関係を構築するために, (A) は「1週間毎日通うことだって実際にありますし」と語った。また, (C) は「結構, 足しげく通ったりとかですね。」と語り, 高齢の親と関係が取れていない初期の段階において, 短期間で集中的に訪問していた。(E) は「1週間後に, 2週間後に, 行きますね。って言うて、『いいです。』って言って頂けるのであれば, また来ますね。」と語り, 1回の訪問で多くの情報を無理に聞き出さず, あえて1週間から2週間程度時間を置いて訪問する姿勢を示していた。これらの共通点は, 社会福祉士が高齢の親との関係構築を重視し, 柔軟な方法で訪問を継続していたことにある。

(B) は支援を求めない高齢の親の状況を把握する必要がある。しかし, 地域包括支援センターという名前だけでは理解されない。そのため, 「まあ, いつも使う手ですわ。高齢者訪問ですわって」と語り, 地域の高齢者宅を巡回するという名目で訪問していた。(D) は「ひたすら私たちのメモを置いて行ったり, 訪問したら, 必ず何かを, 電話の着信履歴は残したりね。」と語り, 高齢の親への訪問の際に成人の子への関わりを試み, メモ³や着信記録を残していた。これらの共通点は, 高齢の親が支援を求めない場合でも, 次の支援につなげるために粘り強く訪問を継続していたことにある。

2) <高齢の親の生活を改善するために経済的問題にアプローチする>

(A) は8セグメント, (B) は2セグメント, (C) は4セグメント, (D) は11セグメント, (E) は6セグメント, 計31セグメントがコーディングされた。

例として, (A) は「生活保護の手続きであつ

たりとかというところの助言をしたりとか, 橋渡しをしたりとか」と語った。これは, 高齢の親が入院の必要性があるものの, 入院費用が負担となるためである。(B) は「低所得もあるし, 場合によっては生活保護につないだケースもあるし, とにかく親が抱え込んでいるんだけど」と語った。これは, 高齢の親が今まで誰にも相談しない状況で発見され, 生活保護申請につなげたことを示している。(C) は「[例えば, 生活保護とか?] はい。(中略) 行ってから進めるって感じですね。」と語っていた。これらの共通点は, 生活保護申請を通じて世帯の経済的問題にアプローチしていたことにある。

他方, (D)・(E) は高齢の親と成人の子ともに金銭管理が困難な状況であり, 結果として生活困窮に陥っていた。そのため, 金銭管理の支援をおこなっていた。(D) は「お母さんの年金をもう娘さんが使ってはって, お母さんも管理できなくなったみたいで。(中略) [別居中の] ご主人の意向で, お母さんの年金の通帳を変えた。」と語った。これは, 金銭管理ができない高齢の親のために他の家族と協力し, 入院費用を確保するための介入をおこなったことを示している。(E) は「債務がどんどんどんどん増えてきている状況だったので, (中略) でも専門的な方に入ってもらって」と語り, 債務整理に向けた専門機関を社会福祉士が紹介することで生活困窮から脱する手助けをおこなった。これらの共通点は, 金銭管理支援を通じて世帯の経済的問題にアプローチしていたことにある。

b) 成人の子に対するアプローチ

3) <高齢の親についてともに考える姿勢で成人の子に接する>

(A) は6セグメント, (B) は1セグメント, (C) は2セグメント, (D) は12セグメント, (E) は7セグメント, 計28セグメントがコーディングされた。

例として, (A) は「息子さんとお話ししている時には, 『まあ, こういうことが大変ですよね。』というようなところを共感して, 息子さんにも心を開いてもらうとか。」と語った。これは,

高齢の親を通じて成人の子の大変さを理解するだけでなく、成人の子に対しても高齢の親の大変なところを共感していたことを示している。(B)は「『私は親とうまいことやっていきたい。こんなことになりたくなかった。』じゃあ、作戦立てようっていうたんです。」と語り、成人の子と社会福祉士が親子関係を改善するための方策について考えたことを示している。(C)は「とりあえず、顔と名前を覚えてもらって、なんかあったら、一緒に考えてくれる人っていう認識を持ってもらうことから」と語り、(D)は「あなたも心配、おとうさんおかあさんも心配、だから私たちは何か力になることはないですか。っていうスタンスで行かないと(後略)」と語った。さらに、(E)は「まずは『お母さんのことで来ているんです。』っていうことで、『何か困っていることがあったらご協力しますよ』というところからは入りますかね。」と語った。いずれも、高齢の親に対するアウトリーチを通じて、特に高齢の親の困りごとを一緒に考える姿勢で成人の子に接していた。

以上の共通点として、社会福祉士が成人の子に共感を示す。そして、高齢の親の問題についても考える姿勢で成人の子に接していたことが示されている。

4) <成人の子から高齢の親に対する意見を聞く>

(A)は4セグメント、(B)は6セグメント、(C)は1セグメント、(D)は6セグメント、(E)は2セグメント、計19セグメントがコーディングされた。

例として、(A)は「息子さんがどこまでしないといけないのかというところを。別にしなくても、いいわけですというところをお示しして」と語った。具体的には、高齢の親の介護をひとりで担っている成人の子に対し、無理に抱え込む必要がないことを説明した。あわせて、介護をどこまで担っているかについても意見を聞いていた。(B)は「[成人の子は]親を思いやっている。それが、ちょっとずれてきているだけやのっていう形で、どうしたらいいの?って、実際、その子

に問いかけましたね。」と語っていた。具体的には、成人の子は高齢の親のことを大事にしているが、親子の気持ちはずれている状況にある。このようななか、社会福祉士は高齢の親との生活について成人の子へ問いかけていた。また、(C)は「親が認知症になってくると、失禁とか食べこぼしとか生活のなかでほころびが出てくるに伴って、こう苛立ち。(中略)子ども自身が親を受け入れられなくなって、苛立つというようなことに。」と語っており、認知症が進行する高齢の親に対して苛立つ成人の子の意見を聞いていた。(D)は「娘さんとなんとかしてコンタクトを取りたい。養護者の意向を確認したい。(後略)」と語っており、介護が必要な高齢の親の今後について、接触が難しい成人の子から意見を聞くよう努めていた。(E)は「あの、息子さんが出てこられて、まあお母さんどうですか?だんだんこう、どうですか?って言ったら、『いや、やっぱり大丈夫です。』って言いはるんですけど。」と語った。いずれも、成人の子が自発的に支援を求めない状況であっても、高齢の親に対する意見を聞くよう努めていた。

以上の共通点として、社会福祉士が成人の子から高齢の親に対する意見を聞く。さらに、そのプロセスで成人の子の感情も引き出していたことが示されている。

c) 成人の子の肯定的な変化

5) <成人の子が自らの意志で社会福祉士に相談できる>

(A)は2セグメント、(B)は2セグメント、(C)は1セグメント、(D)は6セグメント、(E)は4セグメント、計15セグメントがコーディングされた。

例として、(A)は「息子さん自体は、まあ、相談の数が多くなってきたりとか。」と語り、高齢の親に対する支援内容に変化がないものの、成人の子からの相談が増えてきたことを示している。(B)は「警察からの通報で動いたケースは、親が信頼してくれたから、なかなかねひきこもりの方って、ここまで歩いてくるのんって大変なんですよ。それでも来てくれたんです。」と語り、

成人の子は自らの意志で地域包括支援センターの事務所まで足を運び、相談できるようになった。これらの共通点は、社会福祉士との信頼関係が深まった。その結果、成人の子が自らの意志で相談することが多くなったことである。

(C)は「まあ、感謝はしてもらえようになりましたね。最初娘さんもNOでしたが、ここが助けてくれる機関やというのがわかってもらえた。」と語った。これは、成人の子は当初は支援を受けることに抵抗があった。だが、高齢の親に対するアウトリーチを通じて、社会福祉士が信頼できる存在であることを成人の子が理解できた。その結果、成人の子が自らの意志で相談できるようになったことを示している。(D)は成人の子と社会福祉士の接触が難しい状態が続いたが、「私と実際に会った上で、この人なら、ちょっと1回くらいは話しても良いのかな。と申ってくださったのかもしれないですね。」と語り、実際に成人の子と自宅で直接会うことで、成人の子と社会福祉士との距離感が近づき、成人の子が相談する意志を示した。これらの共通点は、成人の子が社会福祉士を相談できる相手として理解し、自らの意志で相談できるようになったことにある。

(E)では「私たちに対するご理解は少しずつかもしれませんが、増えてくるのかなというのは感じているんですけど。」と語り、成人の子が少しずつ社会福祉士を理解し、困った時に成人の子自ら相談できるようになってきたことを示している。

6)〈成人の子が高齢の親に対する思いを社会福祉士に話ができる〉

(A)は2セグメント、(B)は4セグメント、(C)は1セグメント、(D)は4セグメント、(E)は1セグメント、計12セグメントがコーディングされた。

例として、(C)は「親が自分を見るもんや。って思っていたり、開き直っていたり。そうですね。こんななったのは親のせいや。」と語った。これは、親子関係が共依存状態にある。そのなかで成人の子がひきこもり状態になった原因を親に求め、そのネガティブな思いを社会福祉士に吐露

した。(D)は「母親・・・父親とはソリが合わないんで、話したくないんです。それは、理解してもらいたいって言われても無理やと思うんで、理解してもらわなくても良いですけども」と語った。これは、もともと高齢の親と関係が良くなく、成人の子が親とは話をしたくない気持ちを社会福祉士に話したことを示している。(E)は「日常生活を見ると、割とちょこちょここと、自分の好きなように使ってはったりとか、現実味がどこまであるんかなって。そのお母さんの動きに、息子さんも困ってはるところもあって。」と語り、親の生活態度に対する困りごとを話した。これらの共通点は、成人の子が高齢の親に対するネガティブな思いを社会福祉士に話ができるようになったことにある。

一方、(A)は「入院した時も、『[親の]顔見に行こか。』とか。(中略)まあ、『元気ですわ。』というようなことであったりとか。」は入院費の負担が軽減されたことで、成人の子に余裕が生まれた。結果的に、高齢の親に対する接し方が変化したことを語った。(B)は「親と仲いいから。親が、『Bさんところに行ったら、なんでも話聞いてくれるから』って行ったら、2時間くらいずっと今の思いのたけを話してくれて」と語り、高齢の親と仲良く一緒に生活していきたいという成人の子の思いを社会福祉士に伝えたことを示している。これらの共通点は、成人の子が高齢の親に対するポジティブな思いを社会福祉士に話ができるようになったことである。

V. 考察

地域包括支援センターが実践するアウトリーチは、成人の子のひきこもり解消を目的としていない。むしろ、このことが成人の子との対等な関係の構築を可能にし、結果的に成人の子に肯定的な変化をもたらすと考えられる。

1. 高齢の親の生活改善を通じた成人の子へのアプローチ

高齢の親に対するアウトリーチは〈高齢の親に

対して継続的に自宅訪問する)だけでなく、〈高齢の親の生活を改善するために世帯の経済的課題にアプローチする〉ことも含まれる。例えば、(A)・(B)・(C)は生活保護の手続きを進めている。生活保護は世帯単位で受給するため、成人の子の経済状況および生活状況を把握する必要がある。また、(D)は高齢の親の生活費を成人の子が使い込んでいる。(E)は債務が増えたことにより世帯が困窮している。生活困窮が高齢の親だけの問題でなく、成人の子との共同生活の中で生じる。そのため、社会福祉士が成人の子に直接アプローチし、その状況を確認する必要がある。アウトリーチを通じて、高齢の親の生活を改善するために世帯の経済的課題にアプローチすることはソーシャルワークの実践において重要な意味を持つ。これらの過程において、社会福祉士は直接成人の子にアプローチするとともに、成人の子が置かれている生活状況を理解することが求められる。

2. 成人の子と対等な関係を形成

社会福祉士は〈高齢の親についてともに考える姿勢で成人の子に接する〉、〈成人の子から高齢の親に対する意見を聞く〉ことで、高齢の親に関する現状について成人の子と話し合う。重要な点として、地域包括支援センターは主に高齢の親に対してアウトリーチを実施している。よって、成人の子に対するひきこもり状態を解消することが目的ではない。成人の子に対するアプローチの実際として、〈高齢の親についてともに考える姿勢で成人の子に接する〉において、(A)・(D)は社会福祉士が成人の子に共感的態度を示している。(B)・(C)・(E)では高齢の親についてともに考えていくという姿勢で成人の子に接している。さらに、〈成人の子から高齢の親に対する意見を聞く〉では、(A)・(B)・(C)では高齢の親と一緒に生活するなかで、成人の子がどの程度高齢の親を支えることができるかを成人の子の意見を聞いている。(D)・(E)では、高齢の親についてどう考えているか成人の子の意見を聞いている。このように、高齢の親に関する現状を成人の子と話し

合うなかで、成人の子と共に考える。また、成人の子に共感的態度で接することはソーシャルワークの実践において重要であり、成人の子と信頼関係を築くうえで必要な態度である。

先行研究において、ひきこもる本人に対して侵襲的にならないよう一定のスキルが必要であることが言及されている。例えば、Funakoshi (2021)らはアウトリーチのプロセスのうち、社会参加に至るまでの段階のひとつとして、「ひきこもり者本人と常にコミュニケーションを取る」ことをあげている(Funakoshi, A., Saito, M. and Yong, R., et al., 2021)。また、東出(2022)はひきこもり者にアウトリーチをおこなう際、訪問する側は「招かれざる客」としてのスキルが支援者には求められ、説得や助言ではなく、無知の姿勢を持つことが重要であると述べている(東出 2022)。このように、ひきこもり者に対するアウトリーチは対等な立場でのコミュニケーションが重要である。本研究では、社会福祉士は成人の子について「高齢の親に支えられる存在」ではなく、「高齢の親を支える存在」として接していることが見出された。このことが、成人の子に対して説得や助言ではない対等な関係を構築することを可能にしたと考えられる。その結果、成人の子のコミュニケーションに変化が生じたものと考えられる。

成人の子は、これまでは高齢の親から「ひきこもりの子」として支援を受ける存在であった。しかし、社会福祉士は「高齢の親を支える存在」としての役割を期待して成人の子に接する。その結果、成人の子が「ひとりの人格を持った成人」という自覚が生まれることで、〈成人の子が自らの意思で社会福祉士に相談できる〉ようになる。具体的には、(A)・(B)において、成人の子が社会福祉士に積極的に相談するようになる。(C)・(D)・(E)において、成人の子が社会福祉士に相談しても良いということを理解できるようになる。こうして、成人の子が「高齢の親を支援する存在」としての役割を遂行できるようになる。このなかで、〈成人の子から高齢の親に関する話ができる〉ようになる。具体的には、(C)・(D)・

(E) は高齢の親に対するネガティブな感情を社会福祉士に話すようになる。一方で、(A)・(B)では高齢の親に対する見方が肯定的に変化したことを成人の子が話せるようになる。これまでは、成人の子は高齢の親から「ひきこもりの子」として支援を受ける存在であった。しかし、社会福祉士は「高齢の親を支える存在」としての役割を期待して成人の子に接する。その結果、社会福祉士との信頼関係が深まり成人の子の肯定的な変化につながったと考えられる。これらは先行研究にない独自の視点である。特に、対等な関係により成人の子に肯定的な変化が促されることについては、ソーシャルワークの新たな可能性を示唆するものであるといえるだろう。

VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界として、信頼性と一般性に関する制約がある。本研究はインタビューの性質上、社会福祉士の主観に依存せざるを得ない部分が存在する。また、成人の子の肯定的な変化に関して言及したが、本研究では後方視かつ横断的なものであるため、本研究では肯定的に変化するケースとそうでないケースの違いに関する検討がなされていない。このため、アウトリーチが成人の子に肯定的な変化をもたらす因果関係の立証が不十分である。さらに、勤務する母体法人、実践する自治体や地域の特性など社会福祉士が取り巻く環境、ならびに社会福祉士の経験年数といった属性に関しても調査をおこなった。しかしながら、本研究の分析の対象となった箇所についてはこれらの違いは認められなかった。今後、研究の信頼性および一般化を高めるためには、分析に至らなかった調査データから属性に関する違いを明らかにする必要がある。

今後の課題として、地域包括支援センターが成人の子を専門的に支援する社会資源および相談機関へつなげる役割を果たしたとしても、地域包括支援センター自体は成人の子のひきこもり状態を解決するための専門的な相談機関ではない。よって、多機関の連携のもと成人の子を支援する必要

がある (KHJ 全国ひきこもり家族会連合会, 2019: 6)。ゆえに、多機関および多職種が分野を超えた包括的な支援をおこなうことも重要である。

謝辞

調査にご協力いただきました皆様方に感謝申し上げます。また、龍谷大学 栗田 修司教授をはじめ本研究にご助言をいただいた皆様方にもお礼申し上げます。

注

- 1 除外したセグメントの分析に関する研究について、本論文投稿時には他の論文には公表していない。
- 2 研究参加者が所属する自治体 a と b は日常生活圏域がそれぞれ異なる地域に属している。地域包括支援センターやひきこもりの支援策については日常生活圏域ごとに異なる特徴や違いはない。
- 3 ソーシャルワークの方法におけるメモや手紙の活用については栗田 (1996) に詳しい。

参考文献

- Barker, R. L. ed. (2003) *The Social Work Dictionary* (5th ed.), NASW.
- Funakoshi, A., Saito, M. and Yong, R., et al. (2021) Home visiting support for people with hikikomori (social withdrawal) provided by experienced and effective workers, *International Journal of Social Psychiatry*, Online.
- Harris, J. and White, V. eds. (2013) *A Dictionary of Social Work and Social Care.*, Oxford University Press.
- 原田 豊・馬淵伊津美・浜田千登勢ほか (2019) 「地域包括支援センターにおける相談からみた中高年層ひきこもり者の課題：鳥取県内地域包括支援センターを対象としたアンケート調査から」『鳥取医学雑誌』47 (3・4), 58-64.
- 東出 香 (2022) 「ひきこもり状態の人へのアウトリーチ」『精神医学』64(11) 1523-1529.
- 東出 香・新村順子・西いづみほか (2020) 「東京都アウトリーチ支援事業における長期高齢化したひきこもり 32 事例の後方視的検討」『日本社会精神医学会雑誌』29(3), 205-214.
- 加川充浩 (2010) 「地域包括ケアの推進方法とその構

高齢者へのアウトリーチにおける同居するひきこもり成人の子への関係構築

- 造：困難事例解決と社会福祉協議会活動の取り組みを通じて』『島根大学社会福祉論集』3, 1-25.
- 勝部麗子 (2019) 「ひきこもりの当事者と家族へのアプローチ」『月刊福祉』102(6), 32-35.
- 全国ひきこもり家族会連合会 (2019) 『地域包括支援センターにおける「8050」事例への対応に関する調査報告書』.
- 小室八千代 (2007) 「アウトリーチ」杉本敏夫・東野義之・南 武志ほか編著『ケアマネジメント用語事典【改訂版】』中央法規.
- 厚生労働省 (2018) 『ソーシャルワーク専門職である社会福祉士に求められる役割について』.
- 栗田修司 (1996) 「ソーシャルケースワークにおける手紙の利用」『岡山県立大学保健福祉学部紀要』3(1), 115-122.
- 内閣府 (2019) 『生活状況に関する調査 (平成30年度)』.
- 日本社会福祉士会 生涯研修センター (2015) 『社会福祉士生涯研修手帳』.
- 日本社会福祉士養成校協会 報告書 (2005) 『わが国の社会福祉教育, 特にソーシャルワークにおける基本用語の統一・普及に関する研究報告書』.
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法』新曜社.
- 特定非営利活動法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会 (2019) 『地域包括支援センターにおける「8050」事例への対応に関する調査』.
- 吉岡京子 (2019) 「地域包括支援センターにおける高齢者の支援困難事例に関する文献レビュー」『日本地域看護学会誌』22(2), 79-88.
- Yoshioka-Maeda, K. (2020) The '8050 issue' of social withdrawal and poverty in Japan's super-aged society, *Journal of Advanced Nursing*, 76(8), 1884-1885.

Building Relationships with Socially Withdrawn Adult Children Living with Elderly Parents through Outreach:

A Survey of Social Workers at Community General Support Centers

AWAJI Kazutaka

(Community General Support Center for The Sakai Third /
RYUKOKU UNIVERSITY, Graduate School of Sociology)

Keywords: adult children experiencing social withdrawal, households with elderly parents, Community General Support Center, certified social worker, outreach

The study aims to clarify how certified social workers at Community General Support Centers build relationships with socially withdrawn adult children living with elderly parents to bring about positive changes. Semi-structured interviews with social workers revealed that adult children began voluntarily discussing and seeking advice from social workers regarding their elderly parents' situations, which also enabled them to express

their feelings about their parents. The outreach activities conducted by these centers are not aimed at resolving the adult children's social withdrawal. However, this approach is believed to have fostered an equal relationship with adult children facilitating positive changes for them. These findings present a unique perspective that is not addressed in previous research.